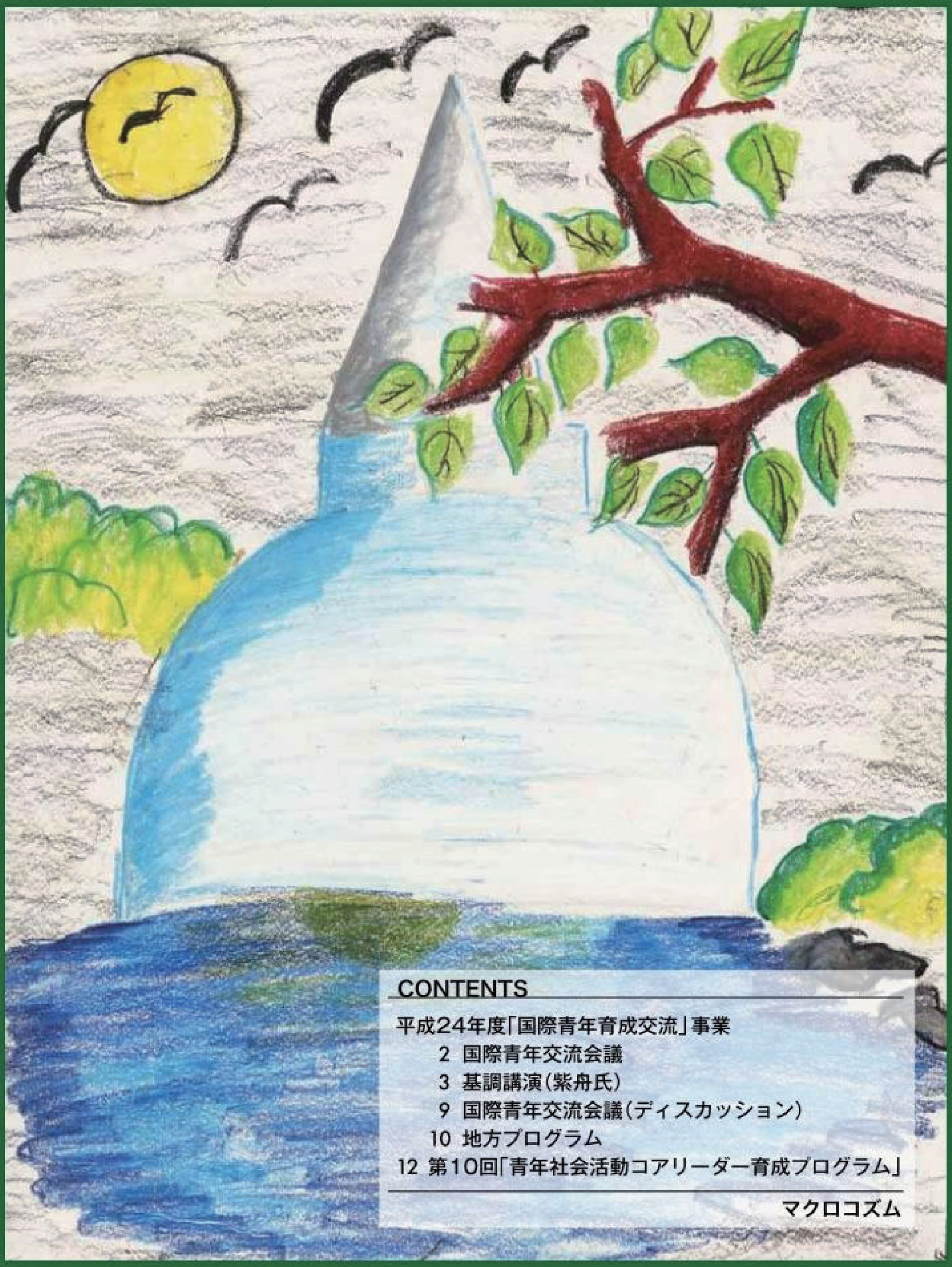
2012.8
vol.99

国際交流活動ニュース

MACROCOSM



CONTENTS

平成24年度「国際青年育成交流」事業
2 国際青年交流会議
3 基調講演（紫舟氏）
9 国際青年交流会議（ディスカッション）
10 地方プログラム
12 第10回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」

マクロコズム

（財）青少年国際交流推進センター

「国際青年育成交流」事業　地方プログラム

外国参加青年は、7月9日（月）～17日（火）、地方プログラムに参加しました。ヨルダン・ハシェミット王国とラオス人民民主共和国の合計24名の青年は、和歌山県と鳥取県を訪れ、ドミニカ共和国とラトビア共和国の合計24名の青年は、函館市と岐阜県を訪問しました。和歌山県と函館市では、2泊3日の合宿型ディスカッション・プログラムが行われ、地元青年と交流しました。鳥取県と岐阜県では、参加青年はホストファミリーに温かく迎えられ、日本の一般家庭での生活を体験しました。また、全ての県市で表敬訪問や施設訪問が実施され、文化や歴史、自然や産業等を学ぶ機会となりました。

和歌山県と鳥取県

日付	プログラム内容
7月9日（月）	和歌山県庁表敬訪問、歓迎会
7月10日（火）	高野山大学訪問、高野山視察
7月11日（水）	合宿型ディスカッション・プログラム1日目
7月12日（木）	合宿型ディスカッション・プログラム2日目
7月13日（金）	合宿型ディスカッション・プログラム3日目 鳥取県へ移動、鳥取県庁表敬訪問
7月14日（土）	あおや和紙工房視察と製作体験、渡辺美術館視察、 ホームステイマッチング
7月15日（日）	終日ホームステイ
7月16日（月）	ホームステイから戻り、歓送パーティー
7月17日（火）	鳥取県発、東京着

和歌山県

米田和一和歌山県環境生活部長を表敬訪問する

世界遺産である高野山を訪れ、金剛峯寺・奥の院等を視察する

地元青年とのディスカッションで話し合った内容を発表する

鳥取県

加藤礼二鳥取県文化観光局副局長を表敬訪問する

あおや和紙工房にて和紙の製作体験をする

ホストファミリーと共に2日間を過ごし、日本の一般家庭を体験する

函館市

中林重雄函館市副市長を表敬訪問する

臼尻水産実験場でエコ漁業の取組を視察する

ディスカッション・プログラムで地元青年と「環境教育と人材育成」をテーマに話し合った内容をまとめる

岐阜県

1300年以上の歴史がある長良川の鵜飼の視察のため、観覧船に乗り込む外国参加青年

枡工房枡屋にて枡作りの伝統工芸体験をする

ホームステイマッチングで、ホストファミリーと会う

函館市と岐阜県

日付	プログラム内容
7月9日（月）	臼尻水産実験場視察、函館山視察、歓迎夕食会
7月10日（火）	五稜郭タワー視察、函館市副市長表敬訪問、公立はこだて未来大学訪問
7月11日（水）	合宿型ディスカッション・プログラム1日目
7月12日（木）	合宿型ディスカッション・プログラム2日目
7月13日（金）	合宿型ディスカッション・プログラム3日目、函館市縄文文化交流センター視察、岐阜県へ移動
7月14日（土）	伝統工芸体験、さくら資料館視察、地震断層観察館視察、歓迎レセプション、ホームステイマッチング
7月15日（日）	終日ホームステイ
7月16日（月）	ホームステイから戻り、鵜飼観覧
7月17日（火）	岐阜県庁表敬訪問、岐阜県発、東京着

第10回「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」

平成14年度に開始された「青年社会活動コアリーダー育成プログラム」では、高齢者、障害者及び青少年の各関連活動における社会活動の経験者を海外に派遣し、その国のこれらの分野で重要な役割を担っている民間組織等のリーダーを日本に招へいするという相互の交流を通じ、社会活動の青年コアリーダーの能力の向上と相互のネットワークの形成を図っています。

総合テーマ(派遣・招へい事業共通)　**【高齢者関連活動】生きがいのある高齢者の生活**
【障害者関連活動】障害者の社会参加のための支援
【青少年関連活動】ユースワーカーの育成の在り方

派遣事業	平成23年 10月9日(日)～18日(火)	派遣先：デンマーク(高齢者関連活動9名)、ニュージーランド(障害者関連活動9名)、ドイツ(青少年関連活動9名) 外国参加青年を受け入れる府県からの派遣者は、招へいプログラムの各種実行委員として受入れに協力
招へい事業	平成24年 2月7日(火)	外国参加青年来日 デンマーク（13名）、ドイツ(13名)、ニュージーランド(13名)から、それぞれ三分野の青年リーダーを招へい
	2月8日(水)	開会式、基調講演、行政官講話、歓迎レセプション
	2月9日(木)～12日(日)	NPOマネジメントフォーラム 総合テーマ「非営利団体と行政のさらなる連携強化と協働について ～非営利団体と行政機関の協働体制を創るには、いかなる考え方や取組が必要かを考え、具体的な方向を見出す～」 2月9日（木）＜課題別視察＞ NPOマネジメントフォーラムのディスカッションテーマ（トピック1～3）に即した施設を訪問し、実際の現場の視察及び関係者との意見交換を実施 【トピック1:行政の施策・方針決定過程への非営利団体の参画】 訪問先：内閣府障がい者制度改革推進会議担当室、公益財団法人さわやか福祉財団 【トピック2：事業実施に際しての行政と非営利団体のパートナーシップ】 訪問先：特定非営利活動法人自立支援センターむく、江戸川区福祉部福祉推進課 【トピック3：行政と非営利団体の情報交換・共有の在り方】 訪問先：公益財団法人よこはまユース、社会福祉法人全国社会福祉協議会 2月9日～12日　上記総合テーマ及びトピック（1～3）に基づき、日本の非営利団体関係者と共に討議を実施
	2月13日(月)	自主研修・日本文化体験
	2月14日(火)～19日(日)	地方プログラム 大分県：【高齢者関連活動】 高齢者への認知症対策を軸に高齢者の生きがいある人生を支える地域での支援体制づくりを考える 島根県：【障害者関連活動】 障害者の社会参加のための支援：地域社会を変えていく力～すべての人が尊重される豊かな社会づくりのために 京都府：【青少年関連活動】 京都のユースワーカーの現状と人材育成を中心とした今後の在り方について
	2月20日(月)	コース別発表会、成果評価会、修了式、歓送会
	2月21日(火)	外国参加青年帰国

地方プログラム

関連する分野（コース）に分かれ、大分県（高齢者関連活動）、島根県（障害者関連活動）、京都府（青少年関連活動）を訪問し、コーステーマに沿ったプログラムを実施しました。訪問府県では、関連施設を訪問し、非営利団体及び各分野の関係者と共に地方セミナーを実施しました。

大分県（高齢者関連活動）

大分県受入実行委員長　高橋　辰彦

「認知症高齢者をいかに地域社会が支えるか」をテーマに、大分県内における認知症高齢者をいかに支えるかを、外国参加青年と共に考える機会とすべく、大分県プログラムを計画いたしました。

大分県庁では県内における統計的実状と政策の実施状況の理解を深めました。

地域の取組として、臼杵市の認知症早期発見のためのコンピュータ画面を利用した手法は興味深いものでした。臼杵市「下の江」地区公民館での高齢者と放課後児童との遊びや、伝統的なおやつを通じた交流は、認知症高齢者問題のみでなく、今後の地域コミュニティに欠くことのできない取組に思えます。また、高齢者福祉施設「暖谷苑」を訪ね、施設における認知症高齢者の暮らしも理解しました。

高齢者問題の中で特に認知症問題は深刻で、外国参加青年、日本青年共に解決の難しさを感じるなか、熱心に討議し、それぞれの青年が重大な課題と認識し、今後広く、国際的コミュニケーションを通じて認知症高齢者問題解決の力となることが期待できる事業となりました。

日　程	プログラム
2月14日（火）	大分県庁表敬訪問 大分県の高齢者施策について講義 歓迎会
2月15日（水）	臼杵市、下ノ江地区地域振興協議会訪問
2月16日（木）	ホンダ太陽株式会社日出工場、 社会福祉法人暖谷福祉会訪問
2月17日（金）	地方セミナー
2月18日（土）	ホームステイ
2月19日（日）	ホームステイ、コース評価会

歓迎会（筆者前列右より4番目）

島根県
（障害者関連活動）

島根県受入副実行委員長　中島　大棋
平成23年度デンマーク派遣団

私は、地域とかかわる仕事をする中で「障害者の生活環境整備や人権への理解がなかなか得られない」と感じることがあります。島根プログラムでは、そうした背景から「地域社会を変えていく力」とは何か、そのために必要な行動は何か、参加者と共に考えました。

地方セミナーでは、各国における障害者への差別の事例を出し合い、原因を掘り下げ、解消するためにできることについて、グループディスカッションを行いました。私は参加しやすい雰囲気づくりを念頭にファシリテーターを務め、堅くなりがちな日本側参加者を持ち前のひょうきんさでほぐしていきました。外国参加青年たちとの意見交換は一つ一つが新鮮で、互いが交わす小さな事例からも大きな発見があり、「悩みながらも問題と向き合い続けているのは自分たちだけじゃない」ということを学びました。この感覚は国籍を問わずグループディスカッションに参加した参加者の間で共有できたと思っています。

今回の地方プログラムがきっかけで知り合えた外国参加青年とのつながり、そして受入れにかかわった地元の活動者とのつながり、これらが大きな収穫となり、実り多くやりがいのあるプログラムを実施することができました。

ディスカッションの様子（右側で立っているのが筆者）

日　程	プログラム
2月14日（火）	島根県庁表敬訪問 島根県の障害者福祉施策について講義 歓迎会
2月15日（水）	島根大学松江キャンパス訪問
2月16日（木）	特定非営利活動法人ぽんぽん船、 社会福祉法人島根県社会福祉事業団光風園訪問 島根県重症心身障害児（者）を守る会の関係者との意見交換
2月17日（金）	地方セミナー、ホームステイ
2月18日（土）	ホームステイ、歓送会
2月19日（日）	コース評価会

京都府
（青少年関連活動）

To Be, or Not To Be.
特定非営利活動法人京都ARU事務局長　梅林　秀行

「ひきこもり」の若者と家族をサポートするNPO法人京都ARUは、外国参加青年との交流の機会をいただきました。

「学校に行きたい・行かなければ、仕事をしたい・しなければ、でもできない」といった本人の内心に矛盾した思い（まさに「葛藤」です）を抱えながら、ある種の自縄自縛にある状態がひきこもりです。外国からの来訪者にどれだけ実情を伝えられるのか悩みましたが、受入準備の中で、ひきこもりとは「自分史」であり、家族、学校、職場、地域の様々な関係と、何より自分自身の成長過程の中で、立ちすくむことを余儀なくされ、ひたすら自分自身の中に閉塞するほかない状態が、ひきこもりの一つの核心だろうと改めて気づきました。したがって、一人の人間の成長の過程、とりわけ「若者」という時期に余儀なくされる困難として、ひきこもりという問題を共有する機会を持てたらと考えました。この世に生を受けてから今に至る、「生きづらさ」の一側面としてのひきこもり体験談を手がかりに、環境や背景は違えども、それぞれの現場で若者の困難と向き合う者同士だからこそ生まれる共感や理解に期待したのです。

ARUの活動概要について説明（筆者右端）

受入れの当日、体験談が語られる間、来訪の青年たちはこちらが驚きを禁じ得ないほど真剣な表情で、耳を傾けてくれました。ひきこもりという問題が、あたかも自分自身の問題であるかのようにです。そして、こちらが話し終えた後、忘れられない言葉を青年からいただきました。

「私たちは若者の様々な困難と向き合っています。若者は人生の過程で、『生きるべきか、死ぬべきか（To Be or Not To Be）』という思いを抱えるようになります。ひきこもりという問題は、まさにこの『生きるべきか、死ぬべきか』にかかわるテーマと実感しました」

この言葉は、ひきこもりの核心をついています。ひきこもりが他領域から断絶せず、青年期の課題という普遍的なテーマと地続きであり、ひきこもり支援が、若者の自立を支援するユースワークとも地続きであることを物語る内容でした。

今回の受入れを通じ、私たちが日々向き合う問題と活動について改めて理解を深めることができました。来訪いただいた青年の皆さんに、心からお礼を申し上げます。皆さんと触れ合った時間を私たちは忘れません。

日　程	プログラム
2月14日（火）	京都府庁、京都市長表敬訪問 京都府の青少年施策概要説明 歓迎会
2月15日（水）	特定非営利活動法人京都ARU、 公益財団法人京都地域創造基金訪問
2月16日（木）	財団法人京都市ユースサービス協会中京青少年活動センター、山科青少年活動センター訪問 京都BBS連盟代表と意見交換
2月17日（金）	財団法人京都市ユースサービス協会東山青少年活動センター訪問
2月18日（土）	地方セミナー、ホームステイ
2月19日（日）	ホームステイ、コース評価会

青少年国際交流事業事後活動推進大会
日本青年国際交流機構第28回全国大会
第19回青少年国際交流全国フォーラム
沖縄大会

テーマ：**触れ合おう　ちむぐくる　深めよう　ゆいま～る**
日　時：平成24年12月8日（土）～12月9日（日）
会　場：沖縄県糸満市サザンビーチホテル＆リゾート
会場ＵＲＬ：http://www.southernbeach-okinawa.com/
講演者：比嘉光龍（ふぃじゃ ばいろん）氏
オフィシャルサイト：http://fijabyron.com/profile/index2.html

*申し込み方法等の詳細は追って連絡します。

日程（案）

第1日目・12月8日（土）	
12:30	受付
13:30	開会式
14:00	基調講演
15:30	分科会
19:00	懇談会

第2日目・12月9日（日）	
9:00	表彰式
9:30	事後活動紹介
11:00	閉会式

日本・ASEAN文化交流プログラム（平成24年10月29日（月））

☆★東南アジアと、出逢う。★☆

今年度で39回目を迎える「東南アジア青年の船」事業[※1]の日本国内活動の一環として実施される「日本-ASEANユースリーダーズサミット」[※2]において、東南アジア諸国連合（ASEAN）10か国と日本の青年たちが自国の文化を紹介します。パフォーマンスや展示により各国の文化を一度に楽しむことができる、絶好の機会です。

（※1）内閣府青年国際交流事業「東南アジア青年の船」事業
http://www8.cao.go.jp/youth/kouryu/data/sseayp.html を参照ください。
（※2）「日本-ASEANユースリーダーズサミット」
日本とASEAN各国及びASEANそのものとの連携を強化するために、より多くの青年が日本とASEAN各国を結ぶネットワークに参加することを目的として、ディスカッション及び文化交流を中心とした合宿型国際交流プログラムです。駐日ASEAN各国大使館及び日本アセアンセンターと連携して実施されます。

○日　　時：平成24年10月29日（月）13:30-17:45
○会　　場：国立オリンピック記念青少年総合センター
　＊小田急線　参宮橋駅下車　徒歩7分
　＊東京メトロ千代田線　代々木公園駅下車　徒歩10分
○参 加 費：無料
○申込締切：10月8日（月）（先着150名）
○申し込み方法：以下のウェブサイト、E-mail、FAXのいずれかでお申し込みください。事前申し込みなしでは入場できませんので、ご注意ください。
URL: http://www.centerye.org/event/2012/yls/culture/
E-mail: yls@iyeo.or.jp　FAX: 03-3639-2436
○お問合わせ：(財)青少年国際交流推進センター　担当：浮田・熊坂
TEL: 03-3249-0767

寺下英明氏（青年海外派遣（昭和36年他））のエッセイが発刊されました！

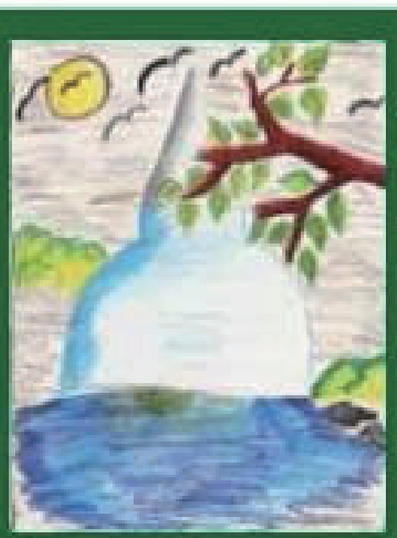
「しあわせってなんだろう」 改めて身近に存在するしあわせを認識するエッセイ

ギリシャの哲学者ソロンの詞を現代にひきうつせば、「名族でも富豪でもないが、身体を鍛え智恵をみがき、働きものできちんと家庭をもち、突然死んでも人々から立派だったとたたえられ、なつかしまれる」 これこそ、この世のしあわせもの、と語っているようです。
IYEO初代会長としての経験談や、様々な青少年活動及び国際交流事業についても触れられています。

出版社：文芸社
価　格：630円

今月の表紙

IYEOがスリランカ教育支援プログラム
(One More Child Goes To School)
で支援しているNayana Randulaさん(10歳)が
描いた「夜明かりの寺院」というタイトルの絵です。



編集後記

このページで紹介した寺下英明氏の「しあわせってなんだろう」を読みました。日々の出来事の中にしあわせを見出し、感謝して過ごしておられる様子がいきいきと伝わってきます。どんな体験をしても、良い面を見るようにし、ほがらかに生きる術を学びました。読むと元気のでる一冊です。（ふ）

MACROCOSM 8月号 vol.99

2012年8月31日発行
編　集　マクロコスム編集委員会
発　行　（財）青少年国際交流推進センター
〒103-0013　東京都中央区日本橋人形町
2-35-14 東京海苔会館6階
TEL: 03-3249-0767　FAX: 03-3639-2436
e-mail: macrocosm@iyeo.or.jp
URL: http://www.centerye.org/ (CENTERYE)
http://www.iyeo.or.jp/ (IYEO)
編集協力　内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室
日本青年国際交流機構（IYEO）
定　価　200円 本体191円
印刷所　株式会社デックス
TEL: 03-3400-8089　FAX: 03-5469-5270

ココロ花咲く、ステキな旅を。

支店名	電話番号
札幌支店	011-221-0821
青森支店	017-723-3671
盛岡支店	019-651-8800
仙台支店	022-263-3232
秋田支店	018-866-0109
山形支店	023-641-4141
福島支店	024-523-4451
水戸支店	029-224-6627
宇都宮支店	028-636-7761
高崎支店	027-325-3201
さいたま支店	048-640-1009
千葉支店	043-243-0109
ストリームライン新宿支店	03-5348-3500
横浜支店	045-326-1120
甲府支店	055-222-0381
新潟支店	025-243-1515
富山支店	076-431-7638
金沢支店	076-233-0109
福井支店	0776-23-2800
長野支店	026-226-4315
岐阜支店	058-263-4657
静岡支店	054-255-1919
名古屋支店	052-232-1091

支店名	電話番号
三重支店	059-221-3331
滋賀支店	077-565-0109
京都支店	075-361-5351
大阪支社第2営業部	06-6344-3927
神戸支店	078-221-1090
奈良支店	0742-23-2371
和歌山支店	073-425-3211
鳥取支店	0857-23-2001
松江支店	0852-21-5425
岡山支店	086-225-1746
広島支店	082-545-1090
山口支店	083-972-5454
徳島支店	088-622-8991
高松支店	087-851-6666
松山支店	089-941-9231
高知支店	088-825-0109
福岡支店	092-739-0010
佐賀支店	0952-26-1131
長崎支店	095-827-4151
熊本支店	096-354-5765
大分支店	097-538-1091
宮崎支店	0985-25-6111
鹿児島支店	099-257-0109
沖縄支店	098-868-8822

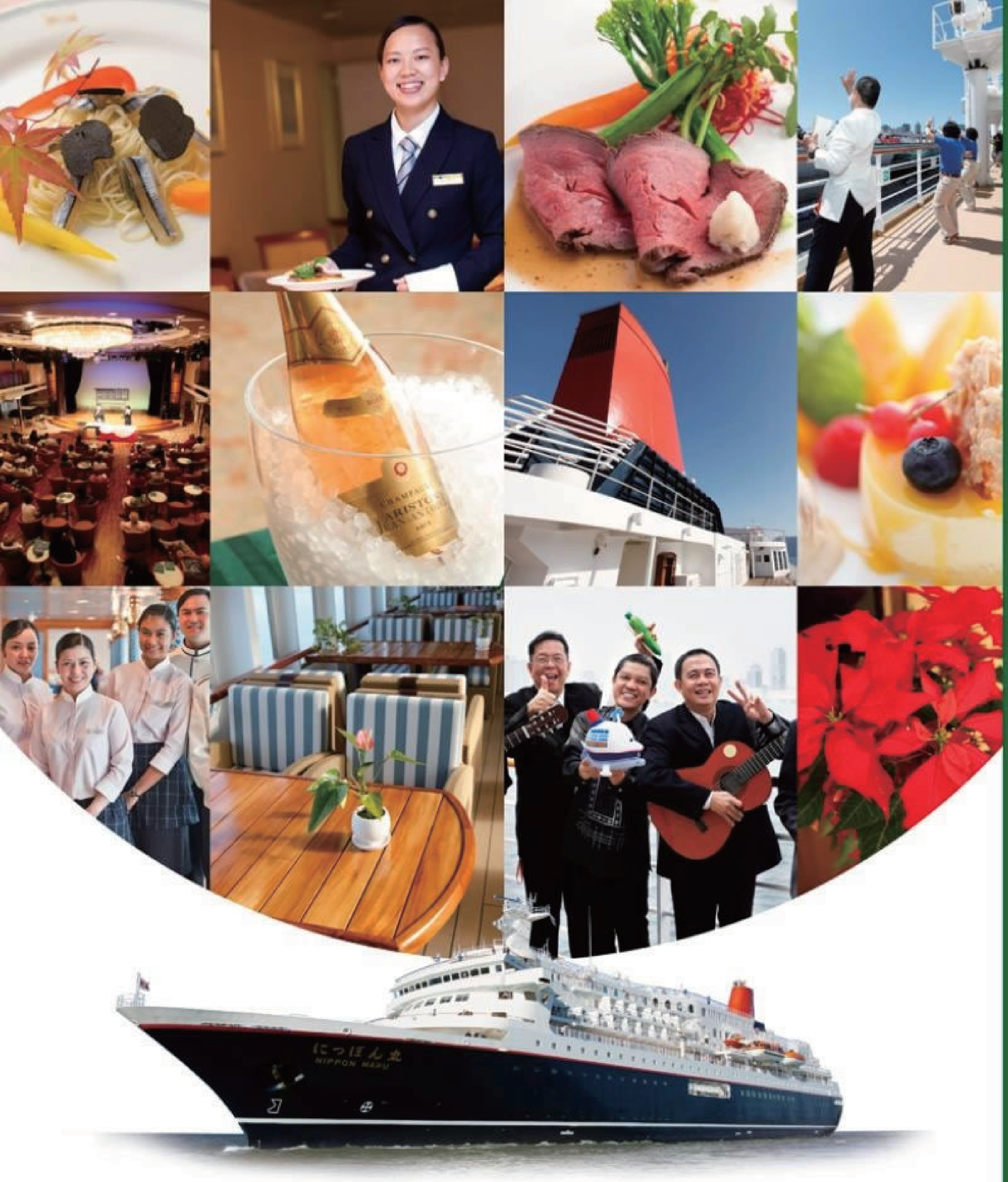
国際会議からご出張まで、
お問合せは、上記支店またはお近くのトップツアー各支店へ

お客様満足度100%+αを追求するサービスマインド。

お客様の立場になる「想像力」、プラスアルファを創る「創造力」。
50年の実績と豊富な情報力を駆使して
高品質・高付加価値の商品とサービスを提供するトップツアー株式会社。
私たちは、旅を通じて新しい出会いと感動を創出する
[旅行インテリジェンス企業]です。

TOPTOUR
東急観光が社名を変えました。
トップツアー株式会社
観光庁長官登録旅行業第38号　©日本旅行業協会正会員・ボンド保証会員
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-5-25 西新宿木村屋ビル16階
http://www.toptour.co.jp
国際旅行事業部　ストリームライン新宿支店
03-5348-3500

マクロコズム　2012年8月号　通巻九九号季刊発行　定価一〇〇円 本体一九一円
編集協力：内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室／日本青年国際交流機構



NIPPON MARU　旬の食材や季節のイベントなど、楽しいテーマクルーズがいっぱいです。

食　旬の食材を船内や寄港地で楽しめる食がテーマのクルーズです。

シーズン　日本人らしい季節感を感じる船でありたいと考えました。四季、花を楽しむ旅です。

観光　手作りにこだわったオリジナルツアー、プレミアムツアーなど、寄港地の愉しみをお手伝いします。

花火　お客様だけの特等席を船上にご用意します。光・音の饗宴が目の前で繰り広げられます。

エンターテイメント　船内で催すイベント、ショー、コンサートなど、一つ一つ丁寧につくり上げていくのが、にっぽん丸です。

カジュアル　クルーズは究極のリラクゼーションです。にっぽん丸流に気軽にのんびりとお過ごしください。

にっぽん丸【主要目】●総トン数:22,472トン　●船客定員:202室524名(最大)　●主機関:ディーゼル10,450馬力×2　●全長:166.6m　●全幅:24.0m　●喫水:6.6m

○詳しいパンフレットをご用意しています。最寄りの旅行会者または、下記へお問い合わせください。

商船三井客船　クルーズデスクフリーダイヤル 9:30～17:00(土・日・祝はお休みです)　0120-791-211　〒107-8532 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル6階　http://www.nipponmaru.jp

参加青年と懇談される皇太子殿下

平成24年度「国際青年育成交流」事業

国際青年交流会議
International Youth Conference

日程： 平成24年7月5日～7日
場所： ANAインターコンチネンタルホテル東京
国立オリンピック記念青少年総合センター

国際青年交流会議は、平成6年度に皇太子同妃両殿下の御成婚を記念し開始された「国際青年育成交流」事業の一環として開催される青年たちのための会議です。

この会議では、「国際青年育成交流」事業により海外に派遣される日本青年及び海外から日本に招へいされた外国青年等が一堂に会し、基調講演をふまえて、「青年の社会参加」を共通テーマとし、環境、教育、文化の各分野について討論を行うことにより、青年の社会参加への意識を高め、社会活動を促し、もって参加青年の育成と国際社会の一層の発展に資することを目的として実施されています。

今年度は、開会式の後、書家の紫舟氏による「『書』の新たな可能性をひらく～日本を世界にメッセージする私の挑戦～」と題する基調講演があり、その後、「青年の社会参加」をテーマにしたグループ討論が行われました。

懇談会での中川正春内閣府特命担当大臣による主催者あいさつ

質疑応答で質問する参加青年

グループ討論

懇談会で歓談する参加青年

国際青年交流会議　基調講演
「『書』の新たな可能性をひらく ～日本を世界にメッセージする私の挑戦～」

書家　紫舟

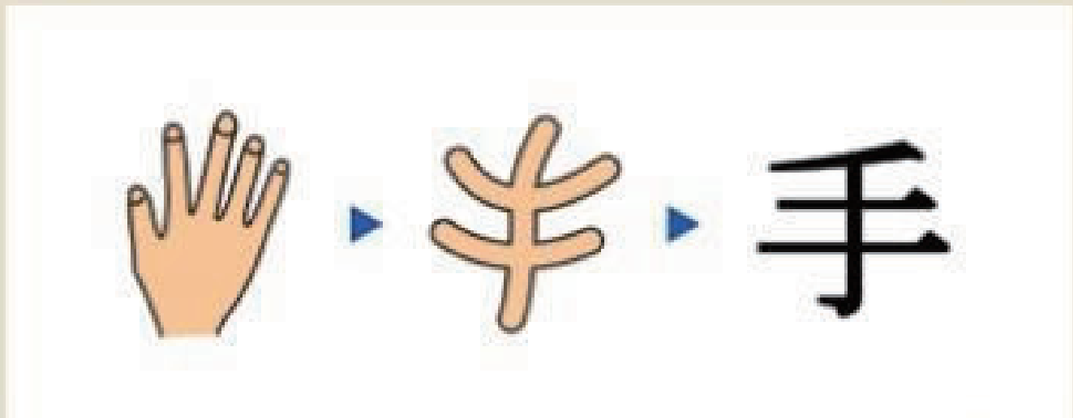
皆さん、こんにちは。私は日本の伝統文化の一つである書道家をしております紫舟と申します。世界中から日本におこしいただき、ありがとうございます。今日は私が関わる日本語と書についてお話をさせていただきます。最後に、書を披露しますので、日本に関心を持っていただけたらと思います。

日本語について

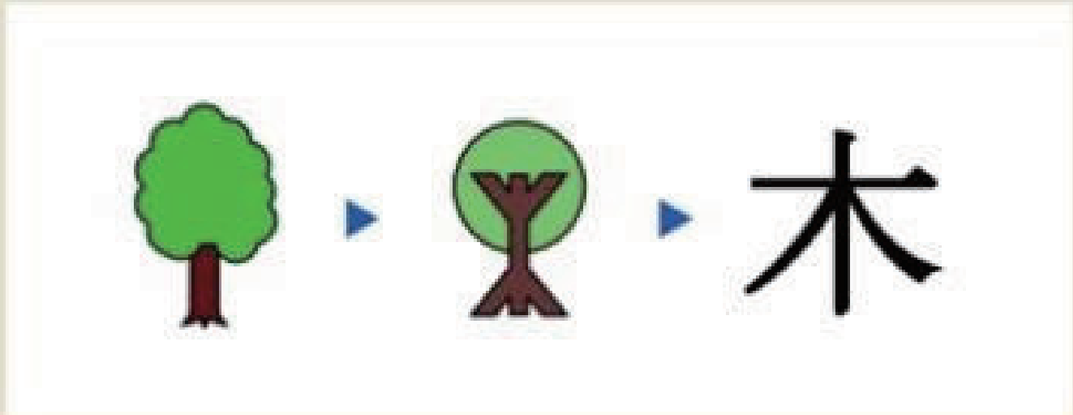
まずは日本語についてお話しします。日本語は中国から来た漢字と日本の「かな」、「カタカナ」で構成されています。カタカナとかなの文字はそれぞれ48ずつあります。日本人は、6歳で小学校に入学と同時に全てをマスターします。漢字は5万文字あると言われています。5万と聞くと、日本語を勉強するのがおっくうになるかもしれませんが、私たち日本人は、高校を卒業するまでに2,000文字をマスターし、普段は3,000文字程度の漢字やカタカナ、かなを用いて生活しているそうです。一つの漢字で一番少ない画数は、一画、横に一本棒を引いたもの、数字の「一」を表します。その下にもう一本線を引くと数字の「二」、その下にもう一本線を引くと数字の「三」になります。日本語は一見すると難しそうに見えますが、発音が簡単で、文法上の制約がゆるく、覚えやすい言語です。

黒い「墨」と呼ばれるインクと動物の毛を使った筆で、文字を表現するのが「書」です。日本には一つの漢字に対して6パターンの「書体」があります。

次に、漢字の成り立ちをお話しします。漢字は今から約3千300年前に中国で生まれました。最初は、牛の骨や亀の甲羅に文字を彫ることで、文字を書き残していました。そこから紙が誕生して、今のように筆を使って紙に文字を残すようになりました。漢字の多くは、実際目に見えたものを字に置き換えることで誕生しました。例えば、「手」という文字の場合、実際に目に見えた「手」は、**資料1**の真ん中の形になって、今は一番右側の漢字になっています。次は「木」です。(**資料2**)「木」



資料1



資料2

という字を二つ合わせると「林」になります。では、「木」という漢字を三つ合わせると何になると思いますか？「森」になります。「木」がたくさんあるので「森」ですね。

書について

続いて、書についてお話しします。日本の書は、中国から渡ってきてから日本独自でも発達していった文化の一つです。(**資料3**)一番目は筆。二番目は墨。三番目は硯、四番目は紙です。二番目の石のような物は、

資料3

油や木を燃やしてできた煤を集めて固めたものです。私たちは非常に便利な物に囲まれ生活しており、キャップを取って、そのまま書けば書き続けられるようなボールペンやペンもありますが、煤を固めたものを、三番目の硯の中に水を入れて、ゆっくりゆっくり摩り下ろすことで黒いインク＝墨汁を作るということをいまだにしています。なぜこんな便利な時代に2,000年前から使っているような手法を取るかというと、墨で書かれたものは、1,000年たっても残るからです。1,000年以上昔の木簡、木に墨で文字が書かれたものを載せています。(**資料4**)木の部分は風化してどんどん削られていくのですが、墨で書かれた字は雨風に耐え長く残ります。また、和紙に墨で書かれた文字も、耐久性があり、たとえ水に濡れても、流れたり、にじんだりせず、100年や200年と長く保つことができるのです。

1000年以上前の木簡

資料4

これは山羊のあごの周りの長くてこしのない柔らかい毛だけを集めた筆です。硬い字を書く時は、馬の強い毛を用います。竹やワラでできた筆もあります。硯に水を入れて、墨を水で摩り下ろし墨汁をつくります。書に使われる紙は、今でも手で漉いて作られるものが多く、紙は植物を材料とし、糊と共に紙を漉いていきます。

自分の人生を手に入れるために会社を辞める

次に、私自身の話をしたいと思います。私は、大学を出て企業に就職。会社勤めをしているころ、心が「ここは私の居場所ではない」というメッセージを送ってきていて、どんどん心の声は大きくなりました。そこで、このままずっと安定し続くであろう人生を一度リセットしようと思い、真剣に人生に向き合うため、三年間勤めた会社を辞めました。日本では、自分の人生を見つけたいとインドに旅に出たり、世界一周旅行をしたり、本に答えを見つけようとする若者も多いのですが、私が自分の天職を見つけるために行ったことは、そうではありませんでした。

私は、学生時代にも、そして社会人になってからも合気道の稽古を続けていました。合気道というのは自分の力だけではなく、相手の動きを利用して、相手の力で技を生み出していく日本の武道の一つです。ある日、私は風邪をひいていたのですが、合気道が大好きでしたので、稽古に行きました。すると、西村先生に、「いつから風邪をひいたの」と聞かれ、私は「今日からひきました」と答えました。その時すでに咳き込んでいて熱もありました。先生は「風邪というのは、ウイルスに感染して、体調が悪くなって鼻がぐずぐずして、そしてようやく今のようなひどい症状になる。もし、今までそれに気づくことができなかったのであれば、もっと自分の内側に関心を持たなければいけない。もっともっと自分の心の変化に興味を抱かなければならない」とおっしゃいました。

そこで私は、合気道の先生が教えてくださったように、自分の内側を見つめることをスタートさせました。約3か月間、「私はいったい何が好きなんだろう」「どう生きたいんだろう」「何のために生きているんだろう」、そんなことを自問自答し続けていました。自分を見つめているとどうなるかと言いますと、結果的に、何もできない自分に気づくのです。それまでの私は何でもできると思っていたのですが、自分を見つめてみると「ああ、私は何もできないんだ」ということを知るのです。何もできない自分に気づくというのは、言い換えると、それまで持っていた自信やプライドや過信、また、自分はこうあらねばならないという思い込みなどを少しずつ降ろす作業をすることでした。間違って背負いすぎていた色々なものを、ゆっくり降ろし、全て降ろし終えた時にお腹の奥底に残っていたのが、書家という道でした。書家になると分かった瞬間に心が軽くなり、心に平安が訪れたのです。書家という職業を見つけるまでは、心の中に非常に重い大きな不安を抱えながら生きていたのですが、今は天職だと思い、迷わず

この道を歩んでいます。もちろん、スタートしたころは生活に対する不安もありましたし、うまくいくか分かりませんでしたが、心の声と感覚を信じて現在まで活動しています。

「書」の新たな可能性を開く

では、今私が制作している作品を見ていただきます。これは「青い空」というタイトルです。次の作品は「雨」という漢字一文字に、「つめたい雨、震える胸」というイメージを込めています。次は「龍」です。若い龍です。今年は辰年ですので、「龍」を皆さんのお手元に配布しました。そして、「喪失感」、何かを失った時の心の痛みを表現しました。最後の書は、「創造人」というタイトルです。私の名刺やパンフレットに必ずつけています。日本は今も非常に大変な状態ですが、時代は常に不安や困難のオンパレードです。今の世代のやるべきことは、前の世代の人たちが残した課題を、創造的なアイデアや工夫によって解決し、次世代の人々により良い時代を送り届けるのが今を生きる私たちの仕事であろうと思い、「創造人」という書を自分が発信するものには必ずつけています。また私自身もそういった時代や物事を創造できる人になるという思いもあります。

普段は、今見ていただいたような伝統的な書に、新しい表現を加え、国境を越えて伝わる表現を生んでいます。書は、海外に出したときに、なかなか通用しないという経験をこれまでたくさんしてきました。異国の文化に興味がある一部の人たちには理解されるのですが、日本語という壁を越えるのはハードです。例えば、かつて私は、国際芸術祭の最高峰と言われるベネチアビエンナーレに自信満々で参加しました。書をパフォーマンスしたり、展示したりし、たくさんの拍手を頂いたのですが、文化の域を超えられない、アートとしては通用していないということを痛感、大きな挫折を味わいました。飛行機の中で小さくなって帰ってきて、自宅のお風呂の中で、お湯に浸かりながら涙を流したことを鮮明に覚えています。それからしばらくは、課題が明らかになったので、あえて海外には出て行かずに国内で今できることをもっと見直し、しっかりとした力をつけてから、改めて世界に挑戦しようと心に決めたのです。

挫折から立ち直る

その後、最初に作った作品を見ていただこうと思います。書は筆に墨をつけて紙に書くというのが、2,000年続いた日本の伝統です。紙に書かれているので、書は平面です。伝統的には平面なのですが、紙や伝統から書を解放し、立体にし、光を当て、影で文字の意志を表現してみようというのが、挫折を経験してから最初の作品です。書は紙に書いてあるので、本来は奥行きがないのですが、想像力を用い、立体にしているところです。鉄を溶接しているところです。溶接した仕上がりは、こんなふうに墨が溜まったような表現ができることが分かりました。(**資料5**)これは、その時の展覧会の様子です。「文字は平面である。生きている感情は立体である。感情と文字が一体となり表現された書には意志がある。その『書』は光を受け、影をおとす」というコンセプトです。(**資料6**)上半分は、漢字の「鳴く」

資料5

資料6

という字を立体にしたものです。(**資料7**)あまりの切なさに涙がこぼれたという意味の「鳴く」という字に表現しています。肩を揺らしながらこぼれ落ちたような涙を影で表現しています。

資料7

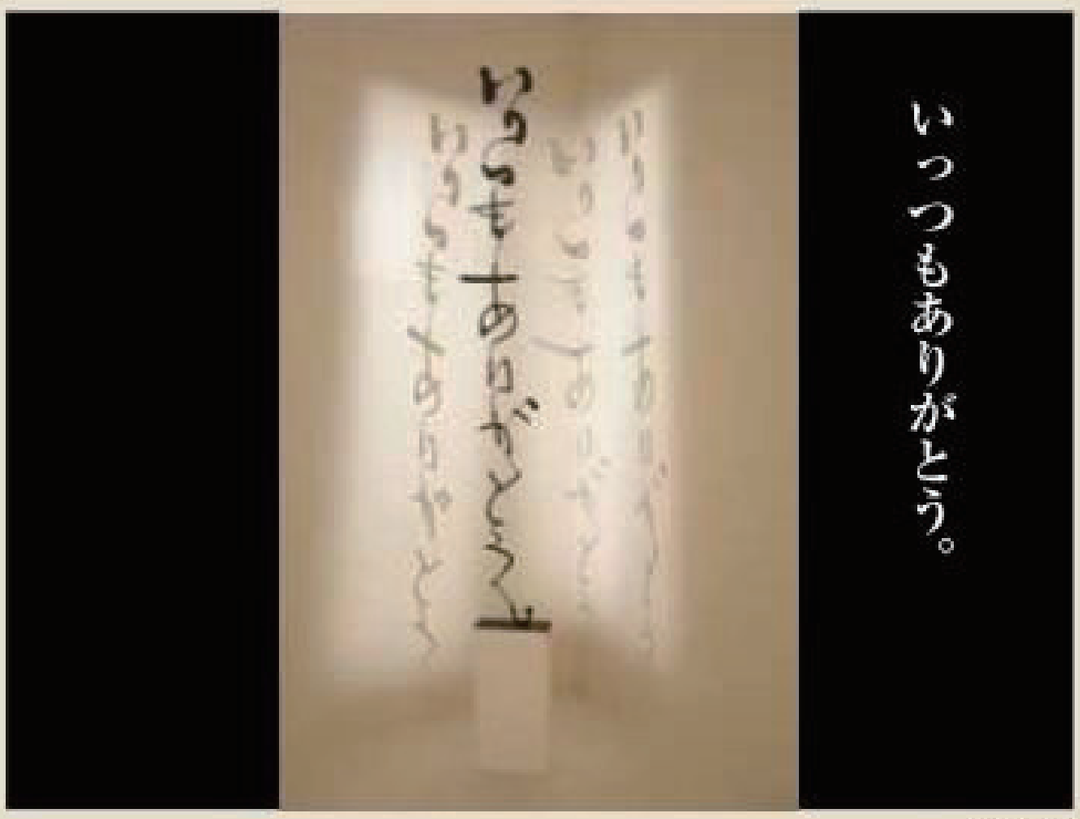
次は「寂」という字です。(**資料8**)私たちは普段、笑顔で周りの人たちを心配させないようにしているのですが、実は心の奥には深くて大きな寂しさを抱えているだろうということで、深くて濃い影を出しています。この作品は先ほどの作品とは違い、オブジェは静態しているのですが、影を布に映し出し、その布を空調で少し揺らし続けています。静態するオブジェに対して、異様に揺れる影が、寂しさの深い影が覆いかぶさろうとするように表現されています。

資料8

次は、「一人ではないことに気付き独りであることを知る」というタイトルです。(**資料9**)私たちは一人ぼっちという意味ではなくて、唯一独立した存在という意味での独り。そこでこの作品は「独」という立体の書に人生のスポットライトを当てて、自分が自分であるためにオブジェと影を使って自分自身を見つめているように表現しています。

資料9

最後は、「いっつもありがとう。」(**資料10**)と書いています。近しい人には、はずかしかったりして、なかなか「ありがとう」と言えない感情を表現。一言、口に出した「ありがとう」の奥にたくさん「ありがとう」が隠れていることを、ひとつのオブジェに対したくさんの影を出すことで表現しています。



資料10

最初にお話ししたとおり、3,000年前の漢字は亀の甲羅とか牛の骨に彫られていました。彫られていたということは、漢字はもともと立体であり、空間であったと言えると思います。私たちはその後、書は紙に書くもの、紙は平面だという考えにとらわれすぎていたのですが、もともと漢字は立体だったという考え方に立ち返り、私は紙に書いた漢字＝書を立体にしています。

では、通常行っている展覧会を動画で見ていただきます。この「やじ馬」という紙に書いた書を立体にするとこうなります。この「夢」という漢字も立体にするとこんなふうになります。これは真ん中にモビールを吊っていて、そのモビールの影と映像がコラボするように作っています。映像の中にモビールの影を映し出しています。

より多くの人に日本を伝えるために

もっともっと世界中の人たちに日本を伝えるにはどうしたらよいかと考えたのが、次の作品です。最初は、平面の書を立体にし、そこに光を当てて、影で文字の意志を表現するという作品を作っていました。その後、映像の中で書を立体にすれば、どんなふうに字が書かれているのか見てもらえるので、より伝わりやすくなるのではないかと思って作った作品がこれです。(http://www.e-sisyu.com/collaboration/2010/10/cool-japan.html) "Cool Japan"と書いています。この作品を海外に出した頃から、ようやく「日本の『書』が分かった」と言っていただけるようになりました。そこから、書は文化なのですが、文化の域を超えてアート作品にすることで、より広く関心を持ってもらえるのではないかと考えるようになりました。

次は「生きる」という書をアートにした作品で、「生命は生命の力で生きている」というタイトルです。すべての命が「生きる」という書の中から生まれていくシーンと日本の伝統的な色合い、四季を表現しています。2005年のベネチアビエンナーレで大きな挫折を味わった後、表現を文化の域を超えてアートにまで昇華させようと真剣に取り組んだ試みで、2011年、ベネチアビエンナーレで展示された作品です。まず、「生きる」という字を書いています。この書が、だんだん枝や根が出てきて植物になっていきます。季節が冬ですので、雪が降っています。「生きる」という書に雪が積もってきました。日本には四つの季節があって、冬はこんなふうに雪が降る厳しい寒さの中で私たちは暮らしています。少しずつ雪が溶けてきました。雪が溶けてくる時期には、待ち望む梅の花が咲き始めます。よく見ると、赤と白の小さな花が咲いています。これが待ち望んだ春の訪れです。雪が溶けてきたので、足元には雪解けの水が流れ始め、生き物が増えてきます。蝶が飛び始めました。若葉が出てきて緑の葉が増え始めます。春真っ盛りですね。水の量も増えてきます。5月には、新緑がきれいな季節になります。花も増えて、緑も増えます。夏になると、植物が生い茂ってきますね。

この頃から、世界に日本を伝えられるような作品をつくることを非常に意識するようになりました。日本の文化の力と産業の力、特にデジタルの力と伝統的な文化の力を融合することで新しいアート作品をつくることができるのではないだろうかと考えるようになりました。文化だけ、産業だけでは、関心を持ってもらえる人の数に限りがあります。しかし、アートにすることで、本当に良いものをつくることができれば、小さな子供から、男女問わず、高齢者にまで関心を持ってもらえ、結果的に日本をメッセージすることができるのではないかと思うのです。

最後に、最近完成させた作品を見ていただきます。タイトルは「世界はこんなにもやさしく、うつくしい」です。(http://www.e-sisyu.com/collaboration/2011/10/post-1.html)書に触れると、その言葉の意味に戻り、世界をつくっていく作品です。まず、書が天から降ってきます。天から降ってくる漢字を自分の影で触れると、その言葉の意味のイメージに変化していきます。東洋

の思想と西洋の思想で世界を構築している漢字を集めています。漢字に触れると、その意味のアニメーションが誕生し、世界が構築されていくのですが、動物や生き物、植物に知能があるように、コンピューターで作られたアニメーションも知能を持っていて、鳥は木にとまったり、蝶は花に近づいたり、雨が降っていると植物が成長するという作品にしています。

書が天から降ってきます。世界を構築している色々な漢字が降ってきているのですが、それを影で触れてみます。そうすると、美しい世界が広がっていきます。今、鳥が飛んでいます。そして、鳥は木に止まっていきました。今、「雪」という字に触れました。「雪」と「山」という字に触れました。すると、雪が降ってきて、山が現れます。今、「花」という書に触れたので、花びらが舞っています。

紙に書いた書を世界に出して、その時に感じた大きな挫折が、文化の制約を超え、自分自身の常識を超えることを教えてくれました。今見ていただいた作品から皆さんが何かを感じ取ってくださり、日本に関心を持ったり、好きになったり、Yahoo！で日本を検索しようと思ったりしていただけると嬉しいです。

最後に、紙に書く書を見ていただきます。今日はこのような筆を使おうと思います。とても細くてコシのない筆です。この筆で書いていると、筆がどんどんねじれていくので、どの面を使うかということを気にしながら書いていきます。そのあたりも面白いと思うのでぜひ見てください。道具の説明をします。今見ていただいているのが、何百年も昔の伝統的な硯です。日本は欧米と違い、サイン文化ではないので、自分のものだということを示すために、はんこを使います。書いた後に、落款を押印します。では、実際に書いてみますので、ご覧ください。**（資料11）**

……（拍手）ありがとうございます。この書の説明をします。書いた文字を一番上から読みますと、「青」、太陽の「陽」、「普」く、「光」と書きました。一番上の二つの漢字である「青い陽」とは、冬が終わり、私たちが待ち望んでいた春の暖かな日差しのことを指します。その下の「普光」とは、「あまねく光」という意味です。全ての人たちを平等に照らしてくれる非常に慈悲深い光のことを言います。「青陽」と「普光」をあわせた造語で、春のような暖かな光が、本日世界中から集まってくださった皆さんの足元と、これからの人生を暖かく照らしてくれるようにという願いをこめて、皆さんのために書き上げました。では、時間となりましたので、私の講演はこれで終了させていただきます。

資料11

国際青年交流会議（ディスカッション）

ドミニカ共和国、ヨルダン・ハシェミット王国、ラオス人民民主共和国、ラトビア共和国から招へいされた48名の外国参加青年と、9月に同4か国に派遣される日本参加青年47名が、テーマ毎に三つのコース（環境、教育、文化）に分かれ、7月5日～7日に2泊3日の合宿形式のディスカッション・プログラムに参加しました。また、7月4日には、外国参加青年のみ、テーマ毎の課題別視察に出かけ、日本の現状への理解を深めました。

日付	プログラム内容
7月4日（水）	課題別視察（外国参加青年のみ）
7月5日（木）	国際青年交流会議 （基調講演、分科会、懇談会）
7月6日（金）	国際青年交流会議 （課題別視察、テーマ別ディスカッション）
7月7日（土）	国際青年交流会議（ディスカッション、成果発表会、昼食交流会、訪問国の青年との交流）

環境コース　テーマ：「環境問題とその要因となっている背景に対して、青年はどのような取組が可能か」

佐藤太アドバイザーの農園を訪問し、大豆の種まきを体験する
（7月4日、外国参加青年のみ）

小グループに分かれてディスカッションする

教育コース　テーマ：「グローバル社会に貢献する人材育成に向けて」

株式会社ベネッセコーポレーション東京本部を訪問し、人材育成に関する説明を受ける（7月4日、外国参加青年のみ）

東京大学を訪れ、秋入学や、英語中心の授業などの取組について学ぶ

文化コース　テーマ：「文化を継承するために私たち青年ができることは？」

財団法人講道館を訪れ、柔道の歴史等について学んだ後、柔道体験をする
（7月4日、外国参加青年のみ）

裏千家東京道場にて、茶室に入る前に手を清め、日本の伝統文化を学ぶラトビア参加青年